

美意識の変化が日本の女性アスリートに及ぼした影響

大道 爽香

Influence of changes in the sense of beauty on Japanese female athletes

Sayaka OMICHI

1. はじめに

トップアスリートのスポーツに打ち込む姿は、国民を魅了しているといえよう。とりわけ、以前より男性が主体であったスポーツ種目では女性の参入が盛んとなり、その活躍が見受けられるようになった。しかし、女性アスリートの鍛え抜かれた“たくましい身体”は、自他共に性を押し測り、不審を抱く場合がある。それは、スポーツが身体接触や身体的特徴から男女が区別され、「男らしさ」と「女らしさ」によってまったく違う身体活動であるように位置付けられてきた歴史があるからである。このようなジェンダー化された身体¹⁾は、身体を鍛えその強靭さや屈強さを手に入れようとしている女性たちのスポーツに対する気勢を削ぐものであり、女性としての身体の在り方に対する戸惑いや葛藤が懸念される。

女性が身体的にたくましくあることから生じる問題を明らかにするために、筆者は女性を取り巻く“美の規範”に着目した。なぜなら、日本の女性にとって「美しくなりたい」という欲求は自然に湧き出る感情であり、その実践は称賛されているからである。そのような“美意識”は、女らしさを色濃く映し出すものとして女性の身体を拘束し続けてきたといえよう。

以上を踏まえ、本研究では女性の「美しさ」をめぐる社会の変化とその影響を受ける女性のスポーツをめぐる事例を取り上げ、日本における美意識の変化が女性アスリートに及ぼした影響とははいかなるものであるかを検討することとした。

2. 「美しさ」について

女性であることを示す“美しい身体”とは、どのような身体であろうか。これには、高度経済成長に伴う家事労働の軽減と豊かな食生活、そして、

社会進出を促すフェミニズム運動などを背景に、1950年頃から登場した美の基準となるものが挙げられる。

具体的には、和光商事（現ワコール）が発案した胸を大きく見せる「ブラジャー」や資生堂が開発した数々の「化粧品」、健康や美容に関する情報が掲載された女性向け「週刊誌」の創刊などのことである。また、人物を挙げると、「スリーサイズ」や「八頭身美人」という言葉の由来は女優の伊藤絹子の体型にちなんで生まれ、歌手の弘田三枝子は「カロリーブック」による食事の数値化を行った。同じ頃には、「ミニスカート」からのびる細い脚が特徴のイギリスの女優、ツイギーが来日した。

これらを背景に、女性の美しさを強調させる理想の身体像とは、戦時中に魅力的とされてきた健康な子どもを産むためのふくよかな「母体」から、脂肪を減らしスリムで華奢な形態を羨望する「瘦身」へと変容した。このような容姿を求めて身体を細く・小さくする女性は後を絶たない。特に、ダイエットに関する情報は瘦身願望を持つ女性を翻弄させた。広辞苑によると、ダイエットの語源とは、第一版（1955年）には「体調維持のための食事制限・規定食」であったが、第三版（1976年）では「美容・健康保持のために食事の量・種類を制限すること」へと記述が変化している。また、美容整形や「やせる」と謳う商品・ダイエット器具などの即効性に期待を寄せる傾向があり、過激な瘦身願望によって変容する不健康な身体として捉えることもできるのではなかろうか。

時代の流れと共に経済が安定し、情報機器の発達によって個性が尊重される社会が目指されていく中でも、容姿などの外見によって男か女かを判断し、女性としてのあるべき身体を押し付ける風潮も未だに根強く残っているのである。その結果、

現代では自分の身体と理想の身体像を比較し、自分の身体に満足できない女性が多い。このような「痩せているほうが美しい」と感じる女性たちの“美意識”は、その身体を拘束し自己管理能力の欠如や低評価の意識に導いているといえよう。

3. スポーツに根付くジェンダー

痩身であることを羨望する美の規範は、スポーツに打ち込む女性たちに悪影響を及ぼしているといえよう。その身体が「アスリートらしいものであるか」、また、女性として「女らしいものであるか」といった評価だけでなく、女性として「美しいものであるか」といった天秤にかけられ評価される。つまり、ジェンダーの規範だけでなく美の規範にも対抗することとなり、本来一致すべき「アスリートとしての身体」と「女性としての身体」は異なるものとして捉えられがちなのである。

そもそも、女性アスリートとは国民にとってどのような存在であろうか。内閣府による歴代の国民栄誉賞者を辿ると、2000年の高橋尚子を皮切りに、2011年には“なでしこジャパン”、2012年には吉田沙保里選手、そして、2016年には伊調馨選手が受賞している。また、オリンピックにおけるメダル獲得数では、2004年に開催されたアテネオリンピック以来、四大会連続で男性よりも女性の獲得する金メダルの数が多くなっている。

これらのように、世界で活躍する女性アスリートたちの知名度は高く、多くの国民に大きな感動を与えているといえよう。

しかし、日本を代表する女性アスリートたちの多くは、そのスポーツに打ち込み自分が女らしからぬ身体へと変容していく過程にセクシュアリティに関わる様々な戸惑いや葛藤を抱えていた。

“戸惑いや葛藤”とは、何十kgもの重りを肩に乗せる、苦手な技に耐え抜く、声を荒げて自分を奮い立たせるといったトレーニングや試合を重ねる中で、ごつごつとした筋肉によって衣服のサイズが大きくなることや、自分の身に起きた嫌な出来事に対し我慢強くなること、容姿の変化から男性と間違われるといった経験のことである。そういった経験をする女性アスリートは、上述のような美意識が出現する頃から存在していた。1960

年代に日本代表として活躍したバレーボールチームの「東洋の魔女」たちは、恋愛を楽しむ態度を許さず、「ユニフォームが正装だと思ってガマン」し、普段は女らしいことがしてみたいと羨んでいた。

現代においては、女子サッカー元日本代表選手である澤穂希は、小学生の頃に出場した試合で女性がサッカーをやっていることをからかわれ、彼女のスパイクを蹴った男子に不満を募らせていた。また、女子ソフトボール日本代表選手の上野由岐子選手は、学校で「おとこ女」とからかわれ、男子に間違えられることにコンプレックスを感じていた。

とりわけ、競技特性の中でも「愉悦性」や「雅味」を兼ね備えたスポーツは女性に適している種目として取り上げられるが、一方で男性的役割から連想される「強靭性」を兼ね備えたスポーツに打ち込む女性たちの身体は「女らしさ」というジェンダーの規範からの逸脱であると捉えられる場合が多いと考えられる。しかし、そのスポーツに打ち込み勝利を掴みたいとする以上は、自らに課せられた当然の試練として受け止めざるを得ないのである。

さらに、発達した“メディア”はたくましい身体が女性であることを確認するために、容姿や風貌に「女らしさ」を取り入れ飾り立てることを要求している。ファッションに注目すると、化粧やマニキュア、アクセサリを施すことや、ユニフォームはフリルや刺繍が装飾されたものや露出の多いものの着用が女性であることを表象しているといえよう。このような女性アスリートの見られる為のプレイスタイルは、人々の注目を集め資本獲得が見込めるが、一方では男性からのまなざしの対象ともなり、批判的に解釈されてきた一面がある。

このような、アスリートの競技やそのパフォーマンスよりも外見や容姿に注目するメディアの報道が顕著にみられることからの影響を避けることができない今日、女性アスリートの社会的評価向上に向けた取り組みが進められている。²⁾

しかし、山口³⁾はたくましい身体でありながら性的商品化を進める女性アスリートはスポーツの

規範（女性の主体性が排除されるルール）に対抗し、身体を自己規律化していると考察している。つまり、メディアによって女らしくない身体が虐げられていると感じるよりも、むしろ身体のたくましさをアピールするための有効な手段となっているということである。例えば、日本代表レスリング選手である吉田選手は「霊長類最強」の異名で知られ、出演したテレビCMでは空を飛び、目から光線を放つ演出で警備会社を具現化した。彼女の身体から放たれる強靭さや屈強さは人々を魅了しているといえよう。

4. アスリートが持つ美意識

ジェンダー化された身体をめぐる研究は、近年広がりを見せている。その中でも、合場⁴⁾は女子プロレスラーのような闘う技能をもった女性は、筋肉隆々でごつい身体を、“一般的な視点”では女性として魅力的ではないことを認識した上で、強く格好良い身体という捉え方をしており、これも女性として魅力的な身体であると位置付ける場合があることを明らかにしている。筆者は、女子プロレスラーだけでなくスポーツに打ち込む女性であれば誰もが、その強く格好良いという捉え方を有する場合があると考えている。

また、スポーツに打ち込むことで得る忍耐や恩恵は、セクシュアリティに関わる様々な戸惑いや葛藤を解消する作用があり、スポーツに打ち込む女性特有の身体であるという捉え方から、前向きな姿勢や自信へと繋がっていくのではないかと考えられる。“忍耐や恩恵”とは、厳しいトレーニングを耐え抜く充実感や試合で勝利する達成感、指導者への感謝の意といったスポーツ特有の気分のことである。この気分が、「女らしさ」でも「男らしさ」でもない「男らしい女」であることに心地良さを生み出し、女性としての魅力を見出していると考えられる。

それならば、女性アスリートは忍耐や恩恵をもつ「強い」女性の象徴として肯定的に解釈されるべきではなかろうか。たくましい身体を魅力的であると捉える女性は、社会に渦巻くジェンダーの規範や美の規範に囚われていないからである。この点について、谷口は「スポーツは、身体と身体

が直接かかわり合う遊戯的な属性を内在しており、その中で妥当性を直接感じることによって、拘束感や義務感を感じることなく、新たな規範を自ら受け入れてしまう可能性を他の生活場面上に秘めている。」⁵⁾と述べている。

このことから、スポーツのみならず女性のたくましい身体が認められ「強い」女性として奨励されるような社会の動きを理解する必要がある。

5. たくましい身体の魅力を引き出す

今日、若い女性たちを中心に定義される“美意識”とは、女性の身体を拘束してきた美の規範（特に、痩身であること）に囚われていることに抵抗する精神的な「強さ」を求めた意識でもある。これは、「痩身」というイメージが「弱さ」を強調させ、痩身願望や痩せすぎによる不健康な身体は美しくないものとして捉える女性が増えていると思われるからである。例えば、「ぽっちゃり」とは専門のファッション誌が創刊されるほどに定着した新しい女性の身体像の呼称である。健康的で「肉付きは良いがデブというほどはない」という抽象的な捉え方からも、この「ぽっちゃり」ブームには痩せなければと苦しむ多くの女性たちを開放しているといえよう。また、2015年にはフランスで痩せすぎたモデルが見る人の身体に悪影響を及ぼすとして罰する法案が可決され、日本でも大きく取り上げられた。

では、「強さ」を求める女性たちが理想とする身体像とは、どのような身体であろうか。筋力トレーニングやダイエット情報誌『Tarzan』では、2007年～2016年にかけて頻繁に取り上げられていた男性の理想体形とは「細マッチョ」であることに即し、女性の理想体形とは、「つくべきところにつき絞るべき部分は引き締まったメリハリボディ」、「痩せ体形ではなく、“絞られた”カラダ」であった。また、2015年にはスポーツを切り口とした日本初の女性誌が創刊されている。その内容は、スポーティー（今にも運動できそう）なファッションの紹介だけでなく、特定のスポーツを女性が楽しめるよう掻き立てられており、「ヨガ」と「ラン（長距離走）」を中心に、「サップ」、「ゴルフ」、「ボルダリング」、「キックボクシング」、

「バイク」、「テニス」、「登山」が取り上げられている。健康の為に身体を鍛えることでエネルギー的な女性が増えているといえよう。また、ファッションの流行においては、スポーツブランドとの共同企画による男性装飾品の取り入れによってアクティブな女性の構築がなされている。女性アスリートはスポーツ産業に付加価値を与えるだけでなく、美容産業にまでその影響を与えているといえよう。

これらを背景に、「強さ」を求める女性の理想の身体像とは、決してたくましいといえるほどの様相ではないが、運動によって筋肉を鍛え身体の変容を自ら行うことなのである。つまり、女性アスリートと同じように運動によって忍耐や恩恵を得ることができると考えられ、「自信」を見出すような心の余裕をもたらす身体像であるといえよう。そして、多様な身体の在り方に理解を示すこととなり、結果的にジェンダーの規範に対抗している。

また、「強い」女性が奨励されるだけでなく、中性的な様相の人々が注目され活躍しているように、今日では性の在り方が多様化している。とりわけ、「ジェンダーレス」（男女の区別を付けない身体表象）は日本の若い男性を中心に性の固定概念を覆している。色鮮やかな口紅を塗り、ヒールを履き、全身をレディースファッションで身を包む男性であるにも関わらず、人気を博しメディアを中心に活躍している。

このような“性の多様化”とは、身体をジェンダーの規範から解放させ、自分自身で美の価値を決めることができるようになった社会の変化であるといえよう。また、身体をジェンダーの規範から開放させ、身体を鍛えその強靭さや屈強さを手に入れようとしている女性アスリートたちに良い影響を及ぼしているといえよう。

6. おわりに

スポーツは男性主体であった種目が女性にも解禁されるようになったことで、女性アスリートに対して「女らしさ」を強調する傾向にあるが、一方では、スポーツを通じて女性の「男性化」も進むようになったといえよう。それは、女性のたく

ましい身体がジェンダーによる規範から逸脱するのではなく、ジェンダーの規範が多様化する中で開放された一つの新しい女性の身体像でもある。

また、女性たちの瘦身願望の背景にある理想の身体像が、常に他者から見られ評価の対象となっていた時代であったと考えるならば、自らの意志によって変容できる身体を追い求めるようになったことは一つの前進である。そして、性の様々な在り方を認める社会が広まりつつある今日、「男性化」した女性アスリートたちの存在は、今後の日本において「女らしい」とされてきた身体の在り方を変化させる可能性を秘めていると考えられる。

主要参考文献

- 1) 飯田貴子・井谷恵子：スポーツジェンダー学への招待, p.134, 明石書店, 2004.
 - 2) 山口理恵：女性アスリートによる“性の商品化”をめぐるスポーツ規範と“構想的外部”, pp.77-88, 年報社会学論集, 第18巻, 2005.
 - 3) 順天堂大学マルチサポート事業：女性アスリートの戦略的支援対策レポート, pp.67-68, 廣済堂, 2013.
 - 4) 合場敬子：女子プロレスラーの身体とジェンダー 規範的「女らしさ」が示唆するもの, p.102, 明石書店, 2013.
 - 5) 谷口雅子：スポーツする身体とジェンダー, p.160, 青弓社, 2007.
- (指導教員 頼住一昭)